



パドマナブ峰 (7030m) 東面

インド北西部、ジャンムー・ア
ンド・カシミール州、チベット文

日印合同東カラコルム踏査 パドマナブ峰(7030m)初登頂

隊長 坂井 広志

化が色濃く残っている、隊商の、
そして東西文化の交差した街レー。
ここを起点・終点とする今回の東
カラコルム踏査路。総踏査距離数
は550^{km}以上、カラコルム山脈
全体の3分の1を辿るこの踏査路
は19世紀から20世紀初頭につけ、
多くの探検家たちが活躍した夢と
冒険の道である。いや、有史以来
ラダック(現インド領)とヤルカ
ンド(現中国領)の住民たちがカ
ラコルム峠(5570^m)を越え
て往来し、交易していた歴史的場
所である。

日印合同踏査計画案は、200
1年8月に日本山岳会と親交の深

いヒマラヤン・ジャーナル編集長
ハリシュ・カパディア氏(ヒマラ
ヤン・クラブ)から海外委員会の
中村保氏宛に届いた。1976年
インド隊と美しい双耳峰ナンダ・
デビの初縦走を成功させて以来
の当会とインドとの合同登山計画
案である。2002年は国連が提
唱する「国際山岳年」であり、日
本とインドの国交樹立50周年の記
念の年でもあるので当会はこの計
画案を大いに歓迎した。

世界中を震撼させたアメリカで
の同時多発テロが起きたのは、翌
月の9月11日。続いてアメリカ、
イギリス軍がアフガニスタンを攻
撃。その余波がインドとパキスタ
ン間でカシミール紛争を再燃させ
た。当時カパディア氏は東カラコ
ルムのArgangas山域に入ってお
り、連絡が取れなかった。11月の
理事会で当会の登山計画として了
解を得、より確実な情報収集と状
況把握のために12月末にカパディ
ア氏の住むムンバイへ行った。
インド側メンバーは既に5名が
決まっており準備体制は万全だっ
た。必要な地図などの資料は全て

2002年(平成14年)
8月号(No. 687)社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目次

日印合同パドマナブ峰初登頂……1	富士山とカムイ・ミンタラ……4
四川省・堂結真拉初登頂……6	ボカラ国際山岳博物館オープン・7
報告……9	科学委員会・フォッサマグナと 塩の道／自然保護・科学委員会・ 山のトイレマナーノートができ ました
支部だより……10	福岡 富山 岐阜 信濃 北海 道 東北・北海道
Climbing & Medicine・12…14	海外の山……15
東西南北……16	詩・樹の木／第22回日本登山医 学シンポジウム／新入会員研修 山行／氷河地形を探索する
新入会員・図書受入……19	会務報告……20
INFORMATION……22	ルーム日誌……23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 ……10~20時
水・金 ……13~20時
第2、第4土曜日 ……閉室
第1、第3、第5土曜日…10~18時

整っており、カパディア氏より説明を受けて渡された。肝心のカシミール紛争については、登山をする地域は紛争の影響をほとんど受けていないので心配ないとのことだった。帰国後すぐに同じヒマラヤン・クラブの松田雄一会員や梶正彦会員を始め多くの当会関係者の協力で隊員を募り、日本側メンバー5名が決った。

1月末には申請を完了させたが、今度はIMF(インド登山財団)からの登山許可がなかなか来ない。紛争の影響の少ないところとはいえない。ド軍が管理する重要地帯、当時カパディア氏は苦勞していろいろなルートより関係機関に許可折衝を行っていた。正式許可通知が来たのは5月3日、ビザが発給されたのは出国前日の5月8日であった。

■カラコルム峠に立つ

キャラバンスタートは5月16日、カラコルム山脈最東端シャイヨーク川の最奥の村シャイヨークより両国隊員各5名にインド軍連絡将校1名、シエルパ・ポーター・コックが16名、馬・ロバ55頭に数名の馬方がついての大部隊となった。

東カラコルムを反時計回りで進む踏査キャラバンルートはベースキャンプに着くまで約1か月間を予定し

た。今どきの登山にしては珍しい長駆のルートである。20世紀初頭の探検時代以降、民間人としてシャイヨーク川を遡行するのは初めてという数えきれない濁流の徒渉、その兩岸には未踏峰が連なる。シャイヨーク川上流部で残雪が多くなり通過不能ということで途中、ルートを変更し、デブサン高原を通過。

北へは有名な中央アジア交易路ヤルカンドへと続く、カラコルム峠。峠へ続く道はボーントレイル(骨の踏み跡)またはスケルトンルート(骸骨の道)と言われ、いまだにおびたらしい数の白骨が累々と道標となつて私たちを導いてくれる。手にした骨一つひとつに名もなき隊商達の苦労が偲ばれる。5月28日インド軍の護衛つきでインドと中国との国境、カラコルム峠に立つ。この峠に強い憧れを持つ登山者は多いが、今は国境となり自由な往来は不可能で、両国とも簡単には許可を出さない。インドは1997年、独立以後初めてイギリスの写真家1人を民間人として許可し、私たちが2例目となる貴重な体験となった。

1907年、41歳の日野強、1909年、第2次大谷探検隊、弱冠21歳の橋端超、やや年長の野村栄三郎に続き、私たちはほぼ1世紀ぶりに

カラコルム峠に立つ日本人となった。目標への数限りない挑戦と失敗の後にこそ「道」は拓かれるのだ。

その後、中央リモ氷河舌端で馬とロバを返し5月31日より隊員とシエルパ、ポーター合計27名による荷上げを開始。ほぼ4日行程でキャンプを徐々に氷河上流へ移動する。まず先発隊(両国隊員各2名)が中央リモ氷河とテラム・シエール氷河を分けるコル・イタリア(5950m)を通過、6月15日には目標とするパドマナブ峰のBC(5650m)に全員が集結した。しかしこのキャラバン中にもインドとパキスタンの関係は悪化の一途をたどった。

■大使館から避難勧告

日本国中がワールドカップサッカーに熱中しているころ、インドのカシミール各地ではイスラム教徒のテロによる殺傷事件が多発し始め、インド・パキスタン間は戦闘状態に突入するやの危機感が高まり、とうとう日本政府はインド在留の日本人に対し帰国勧告を発令した。

日本山岳会の留守本部にも外務省より連絡が入り、私たち登山隊の動向を心配し、できれば帰国してもらいたいという依頼があった。衛星電話で連絡を受けた時、私たちは中央

リモ氷河上のまもなくコル・イタリアに着く位置にいた。日本隊員間での話し合いで、隊員の1人は「最悪のこととなれば日本山岳会は対外的に批判を受けるであろうが、登山統行は参加した隊員が最終的に責任を持ち決定すべきであり、その覚悟で我われは来ている」と言った。隊長の私も同意見であったのでインド隊とも相談し登山は続行することにした。インド側隊長カパディア氏をはじめ、インド隊員たち、連絡将校ボロー氏(インド陸軍)とはキャラバン開始から信頼関係が日に日に強まり、友好的な合同隊の中で互いの協力関係が成立していた。

■雪壁、雪庇を抜けて頂上へ

シアチェン氷河山域の7千級級の未踏峰は70年代にパキスタン側から入城した登山隊によつてほとんど登られている。その多くは日本の登山隊である。ありがたいことに日本ヒマラヤ協会の尾形好雄さんやカラコルムの山岳地図研究の第一人者、宮森常雄さんからこの山の遠景写真を多数送っていただいた。この資料のおかげで私とタクティクス担当の棚橋隊員は登攀可能なルートは南稜であろうと日本で予測していた。

未踏峰パドマナブに予定された登



日本人として1世紀ぶりにカラコルム峰に立つ

山期間は15日間。6月14日の先発隊（両国隊員各2名）はやさしい氷河を辿り1日の偵察で標高6250¹の南稜のコルに達し、そこにAC（アタックキャンプ）を設営することを決めた。南稜は平均斜度45¹50度の花崗岩を主とした稜。この斜度からすれば難易度は高くはないルートと思われた。ところが、稜線上には雪の小リッジが幾重にも入り組みギヤップを形成しながら部分的には70¹80度の斜面が立ちはだかつていた。ルート工作は延べ4日間、標高6750¹付近にまで到達した。

登山開始から12日目の6月25日、アタックを行う。私と棚橋隊員、サティア・ダム隊員の3名。午前3時

50分にACを出発。ダム隊員は体調悪くペースも遅いためアタックをあきらめた。8時半にはルート工作の最高到達地点6750¹に達した。ここから山頂までの標高差はわずか300¹足らずだが、各ピッチはきわめて難しいルートとなった。強風とガスが頂上部を覆ったため、ここが終了点かわからぬまま、1ピッチずつルートを伸ばす。

ACを出発して約11時間、上部の雪壁を見上げながら「ちよつと怖いですね」と言う棚橋隊員のビレイで次のピッチを私がリードする。踏み固めても全く締まらないザラメ状の雪質の垂壁、ラッセルは次第に深くなり傾斜は増すばかり。約30¹続いた雪壁の終了点は雪底となり、深さ2¹以上の溝が最後はトンネル状のトレースとなった。「あと5¹、この危機的狀況が続くのなら下降したい」というのが私の正直な印象だった。最終ピッチの26ピッチ目、棚橋隊員がリードし、シュークリームのような氷塔の基部に達する。頂上。午後3時10分であった。

■踏査を終えて氷河の舌端で

残念ながら第2次アタックを予定していた大江・福和田隊員、インド人2名は天候悪化のため中止。しか

し、パドマナブの登山と同時期にカパディア氏は林原隊員とまだ誰も入った記録のないアツパー・テラムシエール氷河を探索する。

6月28日、隊はBCを撤収、テラムシエール氷河を下り、シアチェン氷河との合流点、通称プロモントリィで1日休養し、6月30日最後のキヤラバンでシアチェン氷河を約40¹歩き通し、その氷河の舌端に夜8時に到着した。宵の明星が輝き、私たちはよく歩いたことを労い、互いに固く握手を交わした。

●インド側メンバー

(The Mountaineers Bombay)

Harish Kapadia (総隊長 56歳)

Lt. Commander Satyabrata Dam

(37歳)

Motup Chewang (36歳)

Huzefa Electricwala (25歳)

Rushad Nanavaty (24歳)

インド陸軍連絡将校

Capt. Madhab Boro (30歳)

●日本側メンバー (日本山岳会)

坂井 広志 (日本側隊長 兼登攀隊

長 45歳)

林原 隆二 (52歳)

大江 洋文 (42歳)

棚橋 靖 (39歳)

福和田 規 (30歳)

●日程

5月9日 ニューデリー着。

5月11日 飛行機でレー到着。

5月15日 車でチャン峠 (5288¹)

を越えパンゴン湖を往復しシャ

イヨーク村へ。

5月16日 シャイヨーク村から馬・

ロバを使いキヤラバン開始。シャイ

ヨーク川を遡行しムルゴを通りデブ

サン高原に出る。

5月28日 車でカラコルム峠 (55

70¹) 往復。

5月31日 中央リモ氷河に入りキヤ

ラバン開始。コル・イタリヤ (59

50¹) を経由しテラムシエール氷

河を下降する。

6月14日 先発隊がパドマナブ峰南

稜のコル (6250¹) まで偵察。

6月15日 BC (5650¹) に全

員終結。

6月25日 パドマナブ峰 (7030

¹) に坂井、棚橋の2人が初登頂。

6月28日 BC撤収。テラムシエー

ル氷河を下降し通称プロモントリィ

を経由しシアチェン氷河を下降。

6月30日 シアチェン氷河からヌブ

ラ谷に出てキヤラバンを終える。

7月4日 車でカルドン峠 (557

0¹) を越えレーに戻る。

7月5日 飛行機でニューデリー着。

7月8日 インドを出国し帰国。

富士山とカムイ・ミンタラ 「国際山岳年」のふたつのイベント

江本 嘉伸

7月、山岳6団体と学界代表で構成される国際山岳年日本委員会主催の「国際山岳年」の注目すべきフォーラムが、相次いで二か所で開かれた。6、7日は富士宮をはじめとする富士山麓で「富士山エコ・フォーラム―富士山の自然を君たちへ」、12日から15日にかけては北海道の旭川と上川町で「国際山岳年・国際エコツアーリズム年記念山岳エコツアーリズム・フェスティバルin北海道2002」がそれぞれ催されたのである。

日本委員会としては、登山家と山をテーマとする学者たちの融合をねらった「私たちはなぜ山にひかれるのか―日本の山をめぐる文化的挑戦」(4月7日、東京・青山で実施)に次ぐ企画で、山岳団体が協力して「国際山岳年」の意義をさらに広げてさまざまな角度で「山と人」がかかえる問題をさぐったかたちである。

こどもたちの活躍

―「富士山エコ・フォーラム」

富士宮市文化会館での「富士山エコ・フォーラム」は、日本委員会委員長、田部井淳子HAT-J代表が「2つの最高峰」として、エヴェレストと富士山の環境問題について自身の体験報告をまじえて講演、石川嘉延・静岡県知事が「富士環境保全の取り組み」を語った。次いでフォーラムの「目玉」である「子どもたちに学ぶ―富士山学習」発表が1時間あまり続けられた。地元富士宮市と山梨

県側を代表して富士吉田市の4つの小中学生たちが取り組んできた富士山をテーマにした学習成果の発表で、世界中で行われている「国際山岳年」行事の中でも、次世代の子らを中心に据えた異色の企画といえるだろう。

その内容が興味深かった。富士宮市立上井出小の71名は富士山の大沢崩れの様子を再現、地下深く根を張るフジアザミを植えて、富士の「崩れ」に少しでも備えようという願いを劇のかたちで発表した。また、富士宮市立富士根北中の27名は、江戸時代の「富士講」の模様を修験者に扮した中学生たちが堂々と演じ、かつて信仰登山で賑わった旧「村山登山道」を復活させよう、と訴えた。

富士吉田市立吉田西小の代表は、「おいしい水の里 富士吉田」というテーマで、富士山の水がなぜおいしいのか、都市で飲んだ水の味との違いに気づいたことに発した研究成果を報告、市の水はすべて汚染されていない地下水でありそれは富士山の伏流水の恩恵だ、と発表した。また、富士吉田市立吉田中学校の2年生の代表は、「金鳥居を大解剖」とうたって富

士吉田市内の有名なしめなわ付きの「金鳥居」についての研究を披露、鳥居の由来、浅間神社に聞いた話などユニークな調査内容を報告した。

会場には、富山、千葉、埼玉、東京などからの小中学生も参加、それぞれが感想を述べた。そして、小泉武栄・東京学芸大教授が、子どもたちの成果を高く評価するコメントをし、日本の山々の特性、魅力についてわかりやすく語った。富士山をめぐる多様なテーマの小中学生たちの熱のこもった演技と研究報告に会場を埋めた1200人の観客からは感動の拍手が鳴り止まなかった。最後に、小中学生代表が日本委員会が起草した「富士山からのメッセージ」を読み上げ、フォーラムを閉じた。山々を見直し、日本に「山の日」を、と訴えたこの文章は英文に訳され、インターネットで世界に発信された。

なお、フォーラムには、大木浩環境大臣も出席、冒頭で祝辞を述べた。開会直前には日本委員会主催の昼食会が開かれ、大木環境大臣、石川知事、渡辺紀・富士宮市長らのほか、主催団体を代表して



大沢崩れの模様を演じる子どもたち(富士宮文化会館にて7月6日)



旭川では「先住民とエコツーリズム」をテーマにディスカッションも。(7月13日)

田部井委員長、フォーラム実行委員長をつとめた西本武志・日本勤労者山岳連盟理事長、田中正男・日本山岳協会会長、大塚博美・日本山岳協会会長、さらに日本ヒマラヤ協会を代表して、尾形好雄常務理事、日本山岳ガイド連盟から降旗義道副会長、山梨県山岳連盟会長の高室陽一郎会長らが参加、弁当を食べながら山々の環境問題などについて懇談した。

会場には、小泉首相からの特別

メッセージも届き、「国際山岳年」

がようやく、国のレベルでも関心を集めるまでになったことを、うかがわせた。

士登山は中止となったが、翌日は宝永火口底や富士古道の散策などの小プログラムが実行され、最後に富士吉田市のビジター・センター野外会場でエヴェレスト登頂から帰ったばかりの渡辺玉枝、山田淳両氏をゲストスピーカーに武川富士吉田市長も参加して賑やかに閉会式が行われた。

エコツーリズムと山

大雪山麓の実験

7月12日の開会式と前夜祭に次いで13日、14日と、北海道の旭川と上川町で開かれた「国際山岳年・国際エコツーリズム年記念山岳エコツーリズム・フェスティバル in 北海道2002」は、山岳とエコ・ツーリズムを結ぶ、別の意味で画期的な試みであった。

ことしは、「国際山岳年」であると同時に「国際エコツーリズム年」でもある。地球温暖化や開発などさまざまなインパクトを受けている山々の環境を保全するには、地域に住む人々が持続的に生活していける仕組みをつくる必要があると、それは「山岳エコツーリズム」によって可能ではないかとフェスティバルの責任者である

小野有五・北大教授(日本委員会委員)は、プログラムの冒頭で述べている。

13日、旭川パレスホテルで開かれたシンポジウムでは、オーストラリア、カナダ、アラスカのエコツーリズムの現状が外国人ゲストをまじえて報告され、近年話題になつていくエコツーリズムのガイドラインというべき「エコツーリズム推奨制度」について下村彰男・東大教授が講演した。また、「先住民民族とエコツーリズム」パネルディスカッションでは、アイヌ民族の川村シンリツ・エオリパツク・アイヌ、貝澤幸一両氏に加え、カナダ先住民ヘイルツツク民族評議会代表ケリー・ブラウン氏が「山の民」の古来からの知恵を活かした文化を理解できるツーリズムを、と、さまざまなケースを紹介しつつ語り合った。カムイ・ミンタラ(神々が遊ぶ場所)大雪山のアイヌ語名)の麓でのフォーラムにふさわしい内容だった。

14日は、上川町の上川かみんぐホールに場を移し、「山岳自然環境の魅力と自然環境への私たちのインパクト」と題し、「オーバークース」「登山道」「山のトイレ」

など、登山者がつきつけられている問題で白熱した議論が繰り広げられた。日本山岳自然保護集合同もこのフォーラムとドッキングする形で参加、パネリストにもなっており、内容については、次号の会報で詳しく報告されると思うので、この稿ではふれないでおく。

8月27日(火)には、信州大学で国際山岳年協賛企画「ライチョウと山岳環境に関する国際シンポジウム」が開かれるなど、秋にかけてまだまだ「山の年」のイベントが続く。

(国際山岳年日本委員会事務局長)

**ヒマラヤ
越えフライト
(第10回)**

**ネパール・ヒマラヤ
トレッキング10日間**

11月1日(金)~11月10日(日)

●成田・福岡発着、成都経由カトマンズへ。

●機窓からの大パノラマをお楽しみください。

国土交通大臣登録旅行業第490号/出日本旅行業協会正会員 日本山岳協会正会員

アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911

大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

党結真拉(ダンチェツエンラ)5833メートル初登頂 ——四川省の隠れた秀峰

2002年日本央莫龍登山隊 隊長 阪本 公一



左・ダンチェツエンラ 中央・中央峰 右・央莫龍

今年の5月21日より6月末までの予定で、横断山脈研究会は中国四川省の沙魯里山(シャルリシャン)山系の未踏峰である、央莫龍(ヤンモーロン)6060メートル、中央峰6033メートル、西峰(党結真拉)5833メートルの三山初登頂を目標に出かけた。この山塊は、1990年に日本大学北校会(工学部山岳会)が北面

より試登しているが、詳しい記録は発表されていない。

2000年5〜6月に横断山脈研究会の会長中村保氏と永井剛氏が南面から探査し、「近くて遠い山」党結真拉(ダンチェツエンラ)と中村氏が「深い浸食の国」の中で紹介している。南西面からならわりと簡単に登れるのではないかとこの両氏の報告を受けて、宮川清明(61歳 登攀隊長、田中昌二郎(61歳)、村山準太(35歳)と私(62歳)の4人の隊で出かけた。中国の地図で、5833メートル峰の左側に「党結真拉」と表記されているので、私達も中村説をとって「党結真拉主峰6060メートル、中央峰6033メートル、西峰5833メートルの登頂を目標」として登山許可の申請をしたが、四川省登山協会からの許可証には央莫龍(ヤンモーロン)6060メートル登山として明記されて許可がおりた。

成都から、康定、雅江、理塘、

そして四川省の西端の街、巴塘へと車で移動。巴塘(バタン)の手前の党巴(ドンパ)村から、2日間かけて歩いた4500メートルの地、アルプス的な素晴らしい景観の玉曲川上流の緑の放牧地に我々のハッピー・バレーBCを建設した。

中村氏たちが感動したという、4800メートルの山上湖「ヤンモーチヨーキン」からさらに東方の標高4900メートルにC1を建設。何度か偵察したが、央莫龍6060メートルの南面は岩壁と懸垂氷河、さらに稜線から大きく張り出す雪庇でガードされ、我われの力では全く登攀不可能と判断した。この山塊は、いくつかの氷河と多くの山稜が入り組み、非常に複雑な地形であり予想以上に難しい山であることが判明した。中央峰6033メートルと党結真拉5833メートルの間に突き上げる中央氷河を登り、中央峰経由央莫龍に登頂するルートを考えて、その下の5335メートルのプラトールをC2予定地とした。

コルからの偵察では、中央峰は稜線が岩壁に遮られて相当厳しくかつ中央峰から央莫龍のピークに至る1キロのナイフリッジの稜線は余りにも遠く、4人の少人数の隊

でこの長距離のアタックに挑むにはあまりにも危険が大きいと判断し、中央峰と西峰の党結真拉の2峰登頂に精力を注ぐことにした。6月10日にC2予定地に装備をデポし、5565メートルのコルまでのルート作と偵察を完了し、翌11日に一旦BCに降りて、13日までアタックにそなえ休養した。

14日から再度登山活動を再開し17日に西峰の党結真拉5833メートルをアタック。上部アイスフォール帯のフィックス(50メートル×3本)を越えて宮川・村山が先行。コルから一段上がったところからは、党結真拉の稜線はアンデスのアルパマヨのようなナイフリッジになっており、宮川・村山の2人はダブルアックスで登攀。12時10分に未踏の党結真拉5833メートルの頂上に初登頂した。朝4時にC2を出発してから8時間の登攀であった。田中・阪本は登攀スピードおよび技術的に、深追いは危険と判断し、5565メートルのコルで登頂は断念した。

翌18日に宮川・村山中中央峰6033メートルにアタックする予定であったが、登攀用具が不足気味であること、党結真拉の登攀で疲れて

おり、数日後に中央峰アタックを延期する事は、登山日数の制限から、無理と判断して中央峰も断念せざるを得なかった。

当初の目標であった最高峰の央莫龍6060には残念ながら登頂することはできなかったが、これまで誰も手をつけていなかった党結真拉5833に初登頂できたことは大いに意義があり、またこの魅力的なヤンモロン山塊を世界の山岳界に紹介する情報を得られた事は大収穫であったと満足している。

また、テント、ロープ、赤旗等

ポカラ国際山岳博物館のソフトオープン — 開館式と現状

■開館式に出席して

海外委員会 神崎 忠男

「国際山岳年」の2002年5月29日、ネパールのポカラに建設中の国際山岳博物館（IMM）が仮オープンしました。

5月29日はヒラリー、テンジンが世界最高峰エヴェレスト（8848）に初登頂した記念すべき

の登山装備だけでなく生活ゴミから使用済みのトイレットペーパーまで、すべてを自身で完全に撤収することにより、私たちの方針であった「クリーン登山」を完全実践することができたことは、無事故安全登山とともに今回の私たち遠征隊の誇りとした。

満開のシャクナゲ、紫ツツジ、イエロー・ポピーなど花の香り芳しいハッピー・バレーBCの上に峻厳と聳える魅力的な未踏の雪氷の秀峰に、爽やかな、すがすがしい登山ができた私たちは本当に幸せ者と、大変嬉しく思っている。

日、来年の5月29日には、登頂50周年の節目を迎えます。そこでIMMのグランドオープンも、この日が予定されており、いよいよ本格的に開館されます。

私は、今回のソフトオープンの開館式に招かれて出席する機会を得ました。地元の児童、学生の団体をはじめ、各地より少数民族が集まっており、その数は約2千人

を超え、それぞれの文化を展示して披露しようと、民族色豊かな独特な太鼓、笛、鐘などの鳴物入りのオープニング。2階展示室の一角には、マナスル日本隊の写真。また、登山装備を着せた怪しげな登山者の人形、ザイル、ピッケル、登攀用具の一部が展示されていますが、山岳・登山関係の展示はにわか展示といったところ。しかし、それでも地元の人たちは、興味ありげに見ていました。

午後になり2階の集會室で、ネパール王国観光大臣、地元ポカラ市長はじめ関係者多数出席のもとセレモニーが行われました。まずエヴェレスト女性初登頂者の田部井淳子さんより主賓のかたちでの

挨拶があった後、来賓各位からそれぞれ立場で祝辞が述べられました。観光大臣からは、国際山岳博物館開設は、ポカラの新しい観光スポットとしての意義は大きいとの挨拶があり、山岳博物館のさらなる充実のため政府からの援助の具体的な話があるなど、和やかな雰囲気の中で開館セレモニーとなり、とくに田部井さんの、ネパール語の歌をまじえた英語での挨拶は、ネパール人に喜ばれ、翌日の新聞にも一面に報道されました。

今回のオープンは博物館というよりは、民族資料館といった雰囲気でしたが、それでもあの大きな建物が完成したということで、関係者の喜びが垣間みられました。

ここに来るまでには、ネパール登山協会（NMA）の関係者は、大変にご苦労があったとのこと。とくにこの事業の強力な推進者であったNMAの元会長タワ・ノルブ・シェルパ氏の突然の死去、不足気味の資金の調達、またモンスーンの影響による建設工事の遅延等々。一時は資金的に行き詰まり、建設中止に迫りこまれそうな時期もあったようですが、その最も苦



ポカラ山岳博物館全景

しい時期に日本の登山界の皆様からの援助資金が届き、危機を乗り越えたことなど、日本からの支援がなかったら、今日の開館につながらなかったとのこと。

なお、鳴り物入りでソフトオープンしたのはものの、来年のグランドオープンに向けてこれからの1年間は、山岳博物館としての機能、内容面の充実の点で、正念場をむかえます。幸いに、日本からはJICAのシニア海外ボランティアとして、北大山岳部OBの安藤久男さんが派遣され、専門学芸員として現地で指導にあたっておられます。エヴェレスト初登頂50周年の明年5月に、国際的な山岳博物館が完成することを期待しながら、今後ともできる限り、支援を続けていきたいと思っております。

最後になりましたが、日本山岳会ははじめ日本の登山界からいただいた暖かい資金援助に対し、ネパール登山協会、国際山岳博物館の関係者が感謝していることをお伝えし、あわせて、国際山岳博物館の募金活動に関わったひとりとして、募金にご協力いただいた方がたに深く感謝し、厚くお礼申し上げます。

■山岳博物館の現状

JICAシニア海外ボランティア

安藤 久男

5月29日、国際山岳博物館のソフトオープニングが開催され、その後の2日間を含めて約5万人の人が集まりました。ネパール政府からは文化・観光・航空省の大臣の列席を得、フランス大使、中国、韓国、外交団、アジア山岳連盟からは日本、中国、韓国の代表団、ICIMOD、UNDPなどの国際機関が参集しました。わが国からは、JICAからの参加を得たのみで、大使館からの出席はありませんでした。ソフトオープニングの主賓は、アパ・シエルパと田部井淳子さんでした。

特に印象に残ったことは、ポカラ周辺から多くの住民の参加を得たことであります。山地民族の民具の展示や音楽の演奏、スクールバスを連ねての中・高校生の参集が印象に残っています。このことはポカラに設置された国際山岳博物館のコンセプトを考える上で重要なヒントを与えてくれました。すなわち、この博物館のもうひとつの目的は、ネパール住民が楽し

め、啓蒙される場所ではなくてはならないということです。今後整備される展示内容や特別展のテーマを考える上でも、この点を考慮に入れなければならないと思います。ソフトオープニングを終えた後の目標は、来年5月29日に開催が予定されているグランドオープニングに向けての次の博物館整備作業であります。

- 建設作業の継続、とくに床のストリート張りの完成。
- オーディオ・ビジュアルルームの完成。

- 事務室の完成。

上記の建設作業を10月までに完了することを要望しています。これと平行し、引き続き展示品の収集と展示コーナーの整備を実施するということが当面の目標です。

この博物館の敷地面積は約5万平方メートル、このうち本館の建坪は3110平方メートルで、セティ川のすぐ東に位置しています。ネパール登山協会の当初計画では敷地内に宿泊施設、食堂などの建設も考えているのですが、その実現は当分不可能でしょう。

今後の整備計画に次の企画を組み入れてはどうかと、私はネパール登山協会に提案しています。会員の皆さんも面白いアイデアをお持ちの方はお知らせください。アイデアの実現には時間と費用がかかります、実現できる可能性があるとは限りませんが。

- 定期的なビデオ・フィルムショー

登山に限らず、軽い教育啓蒙番組を主体とする。すでに日本大使館からは借用可能なビデオリストをもらっています。各国の大使館にも問い合わせる予定。

- 登山技術、高度障害などのトレーニング・クラスの開催。

- ヒマラヤの自然に関する講演会。
- マナスルやエベレストの三次元表示のコンピュータグラフィックスのソフトの開発。

- 人工岩壁（もしくはエヴェレストなど山のモデル）の建設。

何はともあれ、ヒマラヤ登山やトレッキングの帰りに、一度ぜひポカラの国際山岳博物館においていただき、現状を観てください。

〔注〕 筆者は、JICAシニア海外ボランティアでポカラ駐在の国際山岳博物館専門学芸員。北大OB、元JICA専門家。トリヴバン大学客員教授。日ネ協会前北海道支部長

報告

REPORT
8月

科学委員会

フォッサマグナと 塩の道を学習する

山行に先立ち、井上先生（国立情報研究所名誉教授）による予備学習会が5月16日、ルームで開かれた。人間の生活に欠かせない塩の移送路は同時に物産の交易路、人と文化の交流路として整備されてきたことを学ぶ。

6月8日、参加者60名が大型バスと乗用車に分乗し新潟県糸魚川市に向う。

フォッサマグナパークに到着、さっそく小嶋先生（明大教授）の説明を受け、糸魚川・静岡構造線の断層露頭と枕状溶岩を観察する。海底にあった堆積地盤がふたつのプレートとの衝突により隆起した際に生じた地質状態を自分の目で見る。

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

る。

次に「塩の道資料館」を訪ねる。ポッカの中心的役割を果たしてきた根知地区の青年団が昭和48年より民具等の収集活動を開始し作り上げたものである。無雪期は牛方が、有雪期はポッカが塩や魚を内陸へ、帰路は生活用品を運んだ様子を思い巡らす。

糸魚川市より長野県小谷村へ向う。途中、姫川に沿って大規模な山の地滑りと崩壊現場を見る。構造線が生まれた時の断層がいたるところにあるため、災害多発地である。

宿のサンテ・イン小谷の温泉でリラックスした後、小嶋先生のスライドを使つての構造線の勉強会が行われた。夕食と懇談会は例によつて楽しい歓談と笑いで充満。

6月9日、快晴。塩の道の重要

な中継地であつた大網部落を8時半出発し根知の山口に向う。同行していただいた「越後いといがわ塩の道を歩く会」の7名の方々から道みち親切な説明を受ける。安全を祈つての石仏、道標や供養塔などが随所にある。牛の水飲み穴付近は細い急な道である。よくも重い荷を背にした牛が歩いたものと感心する。また、有雪期のポッカの苦勞を思う。

標高840mの大網峠で少休止角間池へ。稀少種の「ルリイトトンボ」に会えたのはハッピーであつた。

白池で昼食。鋭角に聳える雨飾山をバックに記念写真。ここから整備された道をどんどん下る。一本杉で山口の部落が見え出す。ポッカたちは往きには安全を、帰りには我が家の団欒を思ったことだらう。

山口にて解散。2日間の有意義な山行は無事終了した。

最後に、平成7年の大水害で鉄道も国道も寸断された時、生活物資が塩の道で運ばれたとのこと。

複雑なフォッサマグナの地域で、塩の道は先人たちの知恵が残したものと改めて感じた次第である。

（向野 暢彦）

自然保護委員会・科学委員会

山のトイレマナーノートが できました

最近沢の水が気軽に飲めなくなつたとか、道の真ん中にとぐろの巻いているのを見かけたとか、富士山や早池峰山に限らず山のトイレマナーの低下が多く指摘されています。

少しでも現状を改善すべく、登山者の立場から見た山のトイレマナーノートを作成しました。これを基に、登山者の啓蒙を通じて山岳環境保全を図って行きたいと思っています。

会員には「山岳」に同封して配付する予定ですが、ルームにも一部置いておきます。事前に必要の方はお申し出ください。お気づきの点は小西までご一報ください。
FAX 042-585-8636

今年もさよばい
で会いましょう

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

福岡支部

カンリ・ガルポ山群偵察

4月19日から16日間、福岡支部は昨年に続いて第2次カンリ・ガルポ山群の偵察にでかけた。中山副支部長、上岡、佐々木、渡部、渡辺、森山、松本の支部会員、関西支部上中会員、非会員3名が参加した。

東チベットのカンリ・ガルポ山群はヒマラヤと横断山脈の中間に位置している。近年中村保氏によって紹介されたように、5〜6000級の秀峰、鋭峰が連座しており、すべて未登峰である。

今回はラサから往復した。4月26日、米堆（ミーツイ）村にキヤ



米堆氷河と最上部のゲム・ソング峰（左・6606m）

ンプして氷河湖まで登り、米堆氷河上部を偵察する。米堆谷に入域した外国人はおそらく私たちが初めてであろう。もつともここに入るためいくつかの問題を解決せねばならなかったが、米堆村（戸数は下6戸、中10戸、上8戸）のチベット族は極めて友好的で親切であった。米堆氷河の最上部には、波密（ポミ）県地図によると6606級峰（旧ソ連の20万分の1地図では6450級。以下の高度はこの地図による）が聳えており、本山群第二の高峰とされる。村人

はこの山名をゲム・ソングまたはゲム・ソングと称している。その東方に信仰の仏山（神山）とされるハモ・コンガまたはヒヤモ・コンガ（6260級）がある。両山の間に、かつて拉古（ラグ）氷河に越えるルートがあったらしい。27〜30日は拉古谷に滞在して偵察に励むが、天候が今ひとつはつきりしない。それでもドジ・ツェンザ（5662級）、ツアシ（5298級）、シュビーナまたはシユビーラ（5903級）、ザッド（6390級）などを確認する。

29日のキャンプでは、ザッド峰がアーベントロートに輝き、その左肩に沈んでいく満月に感動ひとしおであった。さらに帰途の5月1日、色季拉（セチラ）近くで見たナムチャバルワの雄姿も鮮やかであった。（松本 征夫）

富山支部

大塚会長を迎えて 第54回総会開かれる

富山支部総会は4月12日、大塚会長を迎え、富山第一ホテルで開催された。

会場に入る前に会長と、富山市



31名が集まった第54回総会

のキャッチフレーズである立山の見える特等席の呉羽山に登る。ここには、立山に向って指差す立山開山の佐伯有頼少年像がある（支部会員広瀬誠氏が発起人で、有志各位よりの寄付金で昨年建造された）。残念ながら曇空で立山を見ることはできなかった。

午後6時、出席者31名、木戸支部長のあいさつに続き各議案、13年度事業報告、決算報告、14年度事業計画、予算案について承認された。

このあと大塚会長より講話をいただく。山岳会100周年に向け

ての事業、資金等についての協力を要請があった。

引き続き懇親会、会長と支部会員とで話に花が咲いた。

播隆祭と高頭山登山

播隆上人の記念碑が建設されて20年を迎えました(建設は1983年)。

今まで雨天になることがなかったこのお祭りが始まる9時ぎりぎりまで、小雨が降っていました。雨用のテントなどを用意していましたが、使うことがなかったのは何よりです。

今年は、大山町から栄教育長、松山課長、小松学芸員の参加があり、70名の参加者になりました。浜田会員の祝辞に始まり、郷土史研究家前田先生の講話、播隆上人の関係者、山岳会、大山町教育委員会の参加者より玉串の奉納、栄教育長より今後も顕彰に協力したいとの祝辞を受け、旧河内の代表よりお礼の挨拶がありました。この後懇親会に入り、10時30分頃より各パーティ高頭山への記念登山に向かいました。次年度も逢いましょうと言いながら、旧河内の人たちはお墓参りの後、二次会を亀

谷温泉で開くのだと楽しそうに話をしていました。支部会員参加者16名。
(木戸 繁良)

岐阜支部

創立30周年記念祝賀会

当支部の創立30周年記念行事を5月11、12日に高山市で開催しました。大塚会長、長尾副会長をはじめ村木元会長、斎藤前会長ほかの方々、そして北は北海道支部から南は東九州支部まで、全国各地から120名余の会員の方がたの



「創立30周年を記念して鏡割り」

参加をいただき、盛大な式典、懇親会、および記念山行になりましたことを、ここに感謝の意を込めて報告いたします。

式典では松井前支部長への感謝状贈呈、30周年を記念して出版した山岳講演集『自然・登山・探検』の執筆者への記念品贈呈を行いました。その後、斎藤前会長から、当支部の創立者である今西錦司博士の思い出話を講演していただきました。

引き続きの懇親会は、大人数ですから当然のごとく盛り上がりしました。遠来の友と旧交を温める人、大塚会長とのツーショットをカメラに収める人、記念品として配付した山岳講演集に講演者のサインをもらっている人等々。アトラクションの高山陣屋太鼓も好評で、「おひねり」が舞台に飛び交っていました。

懇親会でいただいた「天恩」という銘酒のおかげか、翌日は予報に反してすばらしい好天。皆さん勇躍して、飛騨の名山である川上岳への登山組と宇津江四十八滝への観光組に別れて出発しました。

登山組の百余名は、2台のマイクパスほかで宮川の源流を登山

口へと向かいました。地元のベテランガイドである島田、木下両会員をリーダーとして数班に分かれて出発、急勾配だけれどよく整備された道を登りだします。広葉樹林の中、シヨウジョウバカマの花がきれいでした。登るにつれて視界が開け、稜線に出ると一面の笹原。遠くに白山、御岳が実に立派な姿をしています。残念ながら槍・穂高の頂上には雲がかかっていました。

約2時間の登りで到着した頂上では、点呼の後一等三角点を囲み、大塚会長の発声で万歳三唱、乾杯、

**高橋尚子の
ヴァム活用方法は、
ダイエットにも
応用できる。**

お問い合わせ・商品に関するお問い合わせは、
フリーダイヤルへ
0120-888-157
(受付時間 月～土 10:00～17:00
日・祝日 10:00～15:00 (日・祝日))

ヴァムに関する情報は
2006年4月1日よりこちらで提供いたします。
<http://www.meinyu.co.jp/>
明治乳業株式会社
〒136-8503 東京都江東区新砂1-2-10

そして宴が始まりました。先発組は途中で採ってきたコシアブラやタケノコのでんぶらを準備しています。揚げたてのでんぶらを肴に酒と弁当と360度の大展望、最高の贅沢です。

1時間くつろいだ後、同じルートを辿り約1時間半で全員無事車止めに到着しました。地元の宮村役場の方がたが用意してくれた冷たいお茶が、また最高です。

ほぼ予定の時間にホテルへ到着すると、観光組はすでにひと風呂浴びて、ひと足先に帰っていました。彼らも途中の展望台から槍・穂高がよく見えたとか。

このように、参加された皆さまに非常に満足していただけたことで、2年間にわたり準備にたずさわった支部員一同もまた、おおいに満足した2日間でした。

(森本 市郎)

信濃支部

第56回ウェストン祭

初夏の風物詩、夏山シーズンの幕開けを告げる上高地ウェストン祭が、6月1、2日、まれに見る晴天のもとに開かれた。

1891(明治24)年、ウェストンが徳本峠を越え、初めて上高地に足を踏み入れて111年、度重なる変遷を経て1947(昭和22)年、今の場所にレリーフが再建された。これに心骨を注いだ先人たちの気概、情熱には頭の下がる想いである。その建立を記念して行われた祝賀会を第1回ウェストン祭と位置づけ、数えて56歳を迎えることとなった。

安曇小学校4年生とエーデルワイスクラブの歌声に導かれて大塚会長の挨拶、献歌と続く。「ウェストン祭の歌」は彼を称えてこの日のために作られ、歌い継がれてきたものである。レリーフのウェストンがちよっとうれしそうに笑って見える。「ありがとう」の声も聞こえたような気がする。

毎年この日朝早く詩を作り、自ら朗読して下さった二代目支部長、詩人尾崎喜八先生の詩を朗読、若いころから親交のあったという会員田村女史は絶筆となった直筆の詩を示し、感情の高ぶりがそのまま梓の川面に乗って流れる。

アルピニストで医師でもある斎藤前会長の記念講演「登山の医学」は、近年特に多くなった中高年登

将」。今年はガールフレンドができたようで、晴れた気持のいい日には2匹で仲良くテラスに出て、日向ぼっこをしています。そのうち、「大将」とガールフレンドの「へび子」、2匹のデート写真などもフォーカスして皆さんにご紹介したいと思います。

また、それ以外にもテラスのガラス越しに山研を覗きこむ猿の姿など楽しいシーンを出来るだけ、載せていきたいと思っています。

穂高連峰の写真も1週間程度ごとに新しいものにしていく予定です。夏の登山、秋の紅葉の時期などの参考になさってください。

新しいさんけん通信、写真版もどうぞよろしくをお願いします。

さんけん通信

さんけん通信 写真版

管理人 木村太郎・弥生

さんけん通信もう随分書かせていただけてきました。しかし、ここ上高地の美しさをどうも今ひとつお伝えしきれない感じがしていました。そこで、インターネット小委員会の方の協力をいただき、山岳会のホームページに山研周辺の季節の写真載せることとなりました。ぜひそちらもご覧になってみてください。

以前、山研便りで紹介した山研の雨戸脇に住む青大将の「大

山者への医学的アドバイスでひとつとつうなずき、あるいは苦笑い、胸にチクリチクリと痛く刺さる。とすると自分は最悪の登山者であったのかも。説得力のある良い話であった。汗してザックを投げ出した後の一服、あんな旨いものはないのだが……。いや、もう

年だ、真面目になろう。

田畑真一会員著『知られざるW・ウェストン』の中から引用し、彼が隻眼であったことにふれられた時はちよっとした驚きの声がかかる。その時代の登山道は獣道に等しかったろうし、ましてや槍・穂高の岩場は特別なバランスを必

要としたはずである。今片目をつぶって歩けと言われても、とてもできるものではない。並外れた肉体と精神の持ち主だったにちがいない。制約された時間が残念。時を改めてじっくり聞きたいものである。

記念山行700余名。碑前祭約300名。

大塚会長、芳賀副会長、西村総務をはじめ多くの皆さんの参加に感謝し、ウェストンの遺徳を称え、先人たちの想いを込めてまた来年この広場に集うことを約束して。

(中野 和郎)

北海道支部

今西錦司元会長の10周忌登山

八幡岳(664・4^{メートル})は、追分節で名高い江差の東に位置する一等三角点の山。北海道内で70座もの山を登られた故今西錦司氏が1985年に最後に登頂された山でもある。6月15日は氏が亡くなられてからちょうど10年目の命日にあたることから、この八幡岳での追悼登山が計画された。

9時江差町の「道の駅」に集合



八幡岳頂上での一行

20人が車7台を連ねて豊部内川奥6^{キロ}地点の登山口に至り、ガスの流れるブナ林の道を登ること2時間で頂上に到着。途中の笹山(611^{メートル})から八幡岳までの道のりは昨年開削されたばかりで、あちこちに新鮮なヒグマの糞が見られた。

頂上の展望は得られなかったが三角点を囲んで今西流パンザイ三唱で故人を偲んだ。帰途、隣接する笹山、元山(522^{メートル})にも登頂。元山では雲の下に出て、江差の海岸線と、咲き乱れるヤマツツジに感嘆した。夜は厚沢部町キャ

ンプ場の集会所で、今西氏関連のスライドを上映し、思い出を語っての盛大な宴会となった。

さらに翌16日、大野町の二股岳(825・6^{メートル})を登って解散。ほとんどが札幌圏からの参加者で、同じ道内でもめつたに來られぬ山やまを満喫した山行であった。

(安田 成男)

東北・北海道支部

東北・北海道地区集会

この行事は今年から20年前に始まった。本年は大塚会長、今村常務理事のほか80人の該当支部会員が6月8日に緑濃い岩手県松川温泉峡雲荘に集まった。

ここ峡雲荘は秘湯を守る会に加盟し、会員の高橋俊彦氏(クロカンスキーの指導員)が支配人である。ゆつくり楽しんでいただくためには70人くらいにしてほしいとのこと、ご案内は該当支部だけにしたが予定を少し超過した。越後支部は支部行事の関係で参加できなかった。

大塚会長から100周年を迎えた山岳会の現状や課題について、今村理事からは担当されている会

報「山」の編集方針などについて講演をいただいた。これは集会でもっとも重視していたことであった。地方会員にとって、ともすれば遠い存在になる中央を引き寄せる使命がこの行事の目的でもある。

恒例の懇親会は次回担当の我妻北海道支部長の乾杯の音頭で始まり、冒頭でプロの音楽家であつてテレマックススキーの指導員でもある平山順子会員によるアルパの演奏が行われ、華やかさの中にとりとした音色に包まれた。今度の会では多彩な支部員の力に依存



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千穂区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



Climbing & Medicine · 12

パルスオキシメーターと酸素飽和度

新井 康弘

高所トレッキングや高所登山にでかけた方は経験があると思いますが、「パルスオキシメーター」という器械を使って、血液に含まれる酸素の指標の1つ「酸素飽和度」を測ることができます。この測定は、医療の現場では呼吸器症状を呈する患者さんに対して、以前から行われています。

山では標高が高くなるほど空気が希薄になり、呼吸によって体に取り込まれる酸素量が減ります。酸素は赤血球中のヘモグロビンと結びついて全身に運ばれるので、ヘモグロビンの量と酸素の量はともに大切です。

すべてのヘモグロビンのうち、酸素と結合したヘモグロビン（酸化ヘモグロビン）の割合（%）を酸素飽和度といいます。この値は大気中の酸素が少ない場合や、肺などに問題がある場合低下します。酸化ヘモグロビンが多い動脈血の色は鮮やかな赤色で静脈血とは違います（吸収される波長が異なります）。パルスオキシメーターは皮膚の上からある波長の光を当て、その吸収のされ方から血液中の酸化ヘモグロビンの割合を計算しますが、

動脈血の酸素飽和度を測定するために、拍動（パルス）に伴って変化する成分だけを取り出しています。

健康な人の平地での値は96～98%です。何らかの病的な理由で90%を切るようになりますと、医療の現場では一般的に酸素吸入が必要と判断されます。山ではどれくらいの数値になるかといいますと、たとえばエヴェレスト街道をトレッキングした300人以上についての検査では、朝食前の平均値が標高約2800_{メートル}で91%、3500_{メートル}で86%、3900_{メートル}で84%、4400_{メートル}で83%、4800_{メートル}で78%でした。同じくキリマンジャロのポピュラーなルートでは、標高1800_{メートル}で94%、2700_{メートル}で91%、3700_{メートル}で85%、4700_{メートル}で75%でした。

この中には途中で引き返した人のデータは含まれていません。ある高度でこの数値に近ければ、少なくともその時点では人並みであることになります。逆にこの数値から著しく外れている場合は、測定が適切でない可能性や、呼吸器系や循環器系に問題が生じている可能性を考える必要があります。

高所経験の豊富な人は自分なりの体調把握法を持っていると思いますが、そうでない人や初めての高度を体験する場合は、自覚できない変化を捉える指標として参考になると思います。しかし、数値に振り回されることなく、からだ全体を見渡しながら判断することがそれ以上に大切です。

した。記念品の長尺手拭のデザインは、版画家で支部で最も意欲的な山登りをしている会員阿部陽子氏によるものである。各支部からいただいたたくさんの地酒を堪能し、来年全国支部懇談会を主管する小川青森副支部長の一本締めで会を閉じた。

翌9日、7時出発で奥松川（裏岩手）山域の三つ石山を目指した。夜は雨が降っていたが、雲の切れ間もあつて何とか天気を持ちそうな模様であつた。階段で始まる急坂を過ぎるあたりから晴れてきて岩手山の屏風尾根、鬼ガ城尾根が見えてきた。残雪を踏みしめて辿りついた三つ石山頂は風が強いので、山荘まで戻って大塚会長の発声で乾杯をした。岩手山の頂上部は雲に隠れて出てくれないが、手前の姥倉山頂からは登山禁止の表徴である蒸気が上がっているのが見えた。

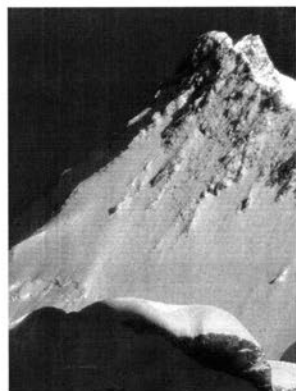
予定より早く13時30分に登山口に到着。隊長の菊池岩手副支部長によって解散が宣べられた。

会員の医師や看護婦さんを後尾に配置した登山であつたが大過なく終了できた。

海外の山

カラコルムで
5人見つかる

江本 嘉伸



6人が帰らなかったスキルブルム峰

2002年7月29日午後、一報は英語版『Japanese Alpine News』編集者、海外委員会理事中村保にあてて、パキスタンのジャスミン・ツアーという会社から入った。

「エンゼル・ピークベースキャンプ付近を踏査していたクライアントたちが、日本人5人の遺体を発見した。もし、ご家族に連絡つくようなら、そのことを伝えてほしい……」

なぜ、日本人とわかったのか、一報にはふれていないが、この地域で5人と聞けば、思い当たる。スキルブルム(7360¹)登頂後に、雪崩の爆風でつぶされた広島三朗はじめ神奈川ヒマラヤン・クラブ隊のメンバーに違いない。

1997年8月17日、神奈川ヒマラヤン・クラブ隊(日本人隊員16人)の広島隊長以下8人は、不安定な雪に悩まされながら、スキルブルムの頂上に立った。広島たちにとっては、K2登頂(77年)20周年を記

念しての輝かしい頂上だった。無事ベースキャンプまで下り、数時間後には撤収して全員無事帰国するという20日未明、事故は起きた。

エンゼル・ピーク側から落ちた氷河雪崩の爆風でほとんどの隊員が飛ばされ、あるいは埋められた。重傷を負った4人は、日本、パキスタン双方の必死の救出作業でヘリに運ばれて生還できたが、隊長の広島、77年のK2隊副隊長だった原田達也、同じくK2隊員だった中込清次郎、土森譲、96年バインターブラック登山隊の隊長をつとめた永澤茂、そして菊田佳子隊員の6人は帰らぬ人となったのである。

広島ははじめ隊員たちの多くは高校教師であり、ともすると自然から遠ざかりがちな子どもたちに日頃、影響力を持っていたから余計衝撃は大きかった。

氷河が想像以上に早く流れているのだろうか、遭難地点からだいぶん離

れた、サボイア氷河のエンゼル・ピーク南面の雪のクローワールの下あたりで遺体は見つかった、という。薬品やガスボンベなど遺体の近くに見える遺留品に、日本語が書かれていることから、神奈川隊の人たちとわかったそう。

情報は、ただちに尾上弘司ら神奈川ヒマラヤン・クラブ隊の生き残りメンバーに伝えられ、遺族たちと協議し、尾上たちが現地へ行くことになった。

1996年7月に発行された「地平線の旅人たち——201人目のチャレンジャーへ」(窓社刊)という本に、広島は一文を寄せている。冒険的な旅人たちのネットワークである地平線会議は、1979年の発足以来、毎月一度も欠かさず「地平線報告会」を開いているが、それが200回に達したことを記念し、歴代の報告者全員に1ページずつ近況と主張を書いてもらい、一冊とした。

広島は、86年11月「イスラーム聖者の廟とは何か?」というテーマで「第85回報告会」の報告者になって

いる。「わが国のイスラームに対する理解は強い偏見の上に成り立っている。戦うイスラーム、近代文明を否定するイスラームという具合だ」と書き出した広島は、インド、ネパールに

較べパキスタンに行く日本人が少ないことを嘆き、「ネパールはナーナールが通じる世界だが、パキスタンはつきり意志表示しないと、やりこめられる。パキスタンへ行く人が増えるということは日本人の国際化が進むということだと思っている」と結ぶ。

欄外の「私のとっておきデータ」というアンケートには、「パキスタンへこれまで53回出かけていること」と答えた。その後も続く予定だったパキスタン通いは不幸にも遭難で絶たれた。

パキスタンへ行く日本人が増えることは「日本人の国際化が進むこと」と言いきった広島の真意は、昨年の9・11のニューヨークの悲劇の後、はつきりしたように思う。タリバンとパキスタンが直接つながるわけではないが、彼らがどのようにしてアフガニスタンで勢力を築き上げたか、隣国であるパキスタンとどんな軋轢があつたか、私たちはすぐには理解できなかった。混乱した情報溢れ、中央アジア地域の歴史と文化に精通する地道な専門家の大切さが痛感されたのである。

6年目の夏の無言の帰還。あるいは伝えたかったことがあるのかもしれない。先に逝った山の仲間の言葉、を、せめてしっかりと聞き届けよう。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



詩

梅の木

丹治 計二

山稜の年古りた梅の木よ
根は土と同化し
幹は巖となり苔むし
枝は偏西の風に旗のように傾き
風雪に耐えながら
なお 緑の枝葉を茂らす
ここにお前はどれ程の
日と月と星の巡りを迎え
そして またそれ程の年月を
過ごすのだろう

また 傍らには命終えたものが
幹も枝も崩れ 樹皮を剥がし
日と月と星の巡りの中に
自らを白い墓標として
育ったものを塵とするまで
どれ程の時間を
立ちつくすことだろう

第22回日本登山医学 シンポジウム開催される

大野 秀樹

5月18、19日、松林公蔵会長
(京都大学東南アジア研究センタ
ー教授)のもと、第22回日本登山
医学シンポジウムが京大会館(京
都市)で開かれた。3度目の京都
での開催であった。シンポジウム
の主な内容は、次のとおりである。
●特別講演

心理世界と物性世界に橋をかけ
よ! (パイオニア医学を夢みて)
——南極での犬との付き合いから
(北村泰一・九州大学名誉教授)

●教育講演
遭難事故発生と責任体制——K
12と梅里雪山の事例より

(岩坪五郎・京都大学名誉教授)

●シンポジウム1

登山にまつわる科学——京都フ
ィールド学への招待

(安成哲三・上田豊・横山宏太郎)

●シンポジウム2

21世紀の登山とフィールドサイ
エンス(平井一正・松林公蔵)

一般演題16題(高所でのエネル
ギー代謝・呼吸循環・活性酸素、

登山中の突然死、急性高山病、高
所トレーニング、および水の衛
生など多岐にわたった発表)

功労賞は永年の低圧低酸素タン

クを用いた高所医学研究に対し万
木良平元防衛医科大学校教授に、

奨励賞は「道迷いハイカーの特徴
と行動軌跡」研究に対し青山千彰

関西大学教授に授与された。

100名前後の参加者を得て、
例年以上に活発な討議が行われた。

一般演題以外の講演者の所属が
すべて京都大学学土山岳会である

ように、探検的パイオニア精神と
学術的視点を重視する京大カラー

の強いシンポジウムであった。特
に、大変な訓練によつて声を取り

戻し、心理の世界と物理の世界を
結ぶ「物心橋医学」を提唱された

北村氏の特別講演、臨床医学に対

する「臨地医学」(フィールドメ

ディシン)の重要性を唱えた松林

会長のシンポジウム講演が、聴衆
に強い感銘を与えた。次回は、筆

者によつて、来年5月31日から6

月1日に東京で開催される予定で
ある。

新入会員研修山行に 参加して

上 幸雄

こんなにも初々しい気分とそれ
だけに少々不安な思いを抱いたの
は、いつのことだったろう。記憶
にない遠い昔のことだ。40年も登
山をやってきたし、最近もちよく
ちよく山に出かけているのに、今
回の研修登山は格別の思いがあっ
たからだろう。

集合場所の島々宿に行つてみる
と、思いのほか人が多いのに驚く。
朝食をとりながら、つい知った顔
を探してしまふ。私の紹介者であ
る森さんや小倉さんを見つけてほ
つとする。それでも夜行列車の疲
れもあつて、10時間におよぶ長丁
場についていけるだろうかという
不安は消えない。新人は総勢13人。

昨今の登山者事情を反映して50歳代以上の方が大半だ。さあ出発。天気も上々、長年計画しては実現していなかった徳本峠へ向かう。しかも日本山岳会に仲間入りさせてもらっての山だ。

歩き始めてすぐにトイレはしばらくくれないです、の声に反応する。トイレ協会としては、出発前に必ず済ませましょう、と言ってる立場からは途中でキジ撃ちというわけにはいかない。中に入ると、男子小便器がない。珍しいが、考えてみれば「大は小を兼ねる」で、これでいいんだと納得する。

島々谷は少し新緑を過ぎたとはいえ、みずみずしいさまざまな緑が美しい。植物に詳しい人もいて、ほんの小さな花の名前も教えてくれる。さすが、日本山岳会だけのことはあるなど感心する。それにしても歩くスピードが速い。先行パーティをどんどん追い抜く。ここでも感心するが、ついていけないだろうかという私の不安はさらに増幅されるのだった。間もなく、最後尾の森リーダーから、先頭速いよという声がかかり、皆なんとなくほっとした表情を見せる。道は澄んだ流れに沿って、ゆっ

くりと登っていく。途中、30分前に出発した地元の小中学生と前に行ったり、追い越されたり。他に大学生の男女のグループもいる。誰かがやはり若い人と山で会えるといいねという。だれしも同感する。

岩魚留小屋は想像したとおり。近代登山の歩みをずっと見てきたような風情で迎えてくれた。傍らのカエデの巨木もすばらしい。その下で、思い思いに昼食をとる。グランドシートを広げ、その周りに座る。その頃にはもう以前からの山仲間の気持になっっている。

徳本峠の良さもわかってきた。昔から登ってきた道をたどり、昔からある山小屋と巨木に寄り添っていると、先人と自分自身が重なっていくようで、しみじみとした喜びがわいてくる。登りは次第にきつくなるが、ニリンソウの群落が和ませてくれる。峠も近づくころ、見たくない光景に出くわしてしまった。登山道のすぐ脇にキジ撃ちの跡。片づける勇気もなく通過する。山のトイレ問題を何とかしたい、自分でなぜ処理できないんだという気持が交錯する。もうすぐ峠というところで、気

分を変えてくれる人に出会った。90歳を超える坂倉登喜さんの姿である。登りはさすがにたいへんな様子でも、峠に立つとシャキッと号令をかけているのが印象的だった。峠小屋の豚汁もうれしかった。峠からは例年よりずっと少ないという残雪と戯れながら、明神へと転がるように下りていった。梓川と合流する直前に見事なシャクナゲに会うこともできた。

山研での交流会はおおいに盛り上がった。新人研修でこんなに酒瓶が空くことはなかったそうだ。翌日のウェストン祭は快晴。白樺荘での午餐会でも話は尽きることがなかった。01年・02年同期の再会を誓ってそれぞれ自分の山へと帰っていった。私の不安は消えた。そして、またこの仲間と山に行く。初々しい気持だけが残った。

(日本トイレ協会 事務局長)

氷河地形を探勝する

― 槍沢・氷河公園 ―

船橋 明

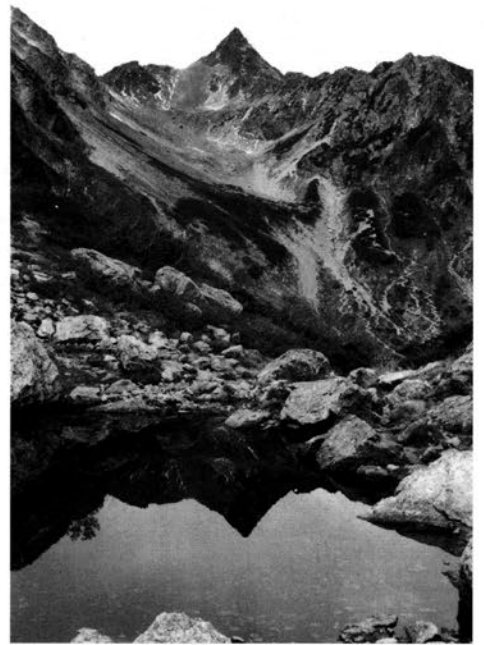
■はじめに
私が3千坪の高い山へ登るよう

になったきっかけのひとつに『日本アルプスの自然』(1955年 築地書房)という本があった。小林国夫という人が執筆したこの本には「日本列島にも氷河があった。氷河公園とよばれる天狗原一帯は氷河作用の顕著に現れた地形である」と書かれており、これに触発されて氷河の痕跡を見に行くかというこで、55、56年2度にわたって白井哲之(現早大教授)と槍ヶ岳から天狗原へ行った。それから40年、天狗原を氷河公園とも呼ぶ言い方も定着し、白井は地理学者になったが、私は氷河のことをすっかり忘れてしまっていた。

しかし、6年前縁あって、北大小野有五先生(当会会員)に同行して、氷河公園へ行くことができた。それから何度か行くこととなったが、それらをまとめて、氷河の痕跡や氷河によってできた地形をご紹介しますこととする。

■モレーンとは

「晴天に恵まれた。錦秋の北アルプスの山歩きを楽しむとともに、北アの美しさを氷河地形の観察という立場から探っていきたい」とかなんとか開講の挨拶をして、山岳研究所を出発。徳沢・横尾を通



槍ヶ岳と天狗池

過して、槍見氷河で槍を見て一ノ俣出合に着く。

ここで氷河のモレーンとはどういうものか考えてみよう。長い時間かかって流れてくる氷河の上に堆積した岩石が、氷河の溶けるところで溜って堆積物の丘を作る。この堆積物の丘には氷河の末端にできるものと、側面にできるものとがある。前者はターミナルモレーン、後者はサイドモレーンと呼ばれるものだ。

さて、この氷河の堆積物すなわちモレーンが、槍沢のもっとも低いところまで科学的に確認されているのはここ一ノ俣である。その標高は1660～1770¹⁾で(五百沢1979)、これが現在判

ジに着く。

■ババ平・U字谷

槍沢ロッジを発つと30分で槍沢キャンプ場に着く。途中のカプト岩あたりはターミナルモレーンの急な登り坂だ。目の前に広がる槍沢キャンプ上の広場と両側の山麓の広がりも、元氷河の跡地だ。初めて氷河の跡地にいる実感が湧いてきた。

ここは高山植物の大群落地だ。

私も山登りを始めて45年、たくさん高山植物を踏みつけたことだろう。何か罪滅ぼしができないかと思い、高山植物の保護活動をするには、まず氷河を知っておく必要があると研究を始めたのである。そんなことを考えながら、ふと後

明しているもつとも氷河が拡大した時期で、約6～7万年前であつたと考えられている。二ノ俣出合のつり橋を渡って30分で槍沢ロッ

ろを振り返ると、山肌は幅広くU字の形をしているのがよく見える。スイスにはいたるところで見ることができ、日本では珍しい。これをU字谷といい、氷河が作った地形だ。

■大曲の越年雪渓

ここから30分も登ると大曲だ。ここは夏には雪渓(残雪)が多量にある。この残雪が翌年に持ち越すと越年雪渓となる。寒冷地化が進みこれが繰り返されると、越年雪渓が氷河となるはずであるが、今の北アでは越年雪渓も数少なくなっていくばかりのようだ。

■天狗原分岐にて

大曲から約1時間で天狗原分岐だ。ここからは各種の氷河地形を見ることができ、手前の大きなモレーンが「天槍モレーン」、一番上段のものが「殺生モレーン」という。また稜線に頭のとつぺんのかつとした大岩場が多く見られるが、これを羊背とよび、氷河が作った造形物だ。

■天狗原氷河公園

槍沢ロッジから3時間半ほどでようやく氷河公園に到着。夏も早いと天狗池も大部分雪に覆われているが、7月下旬にもなると水面

に槍の穂を映し、周りの高山植物群とともに天上の楽園を現出する。この紅葉は9月末までで、20日ごろには1回新雪が来ることもある。ナナカマドの織りなす錦秋をバックに新雪の槍の穂と、三段紅葉はすばらしいの一語に尽きる。天狗池は氷河湖といわれる。氷河期に蓄積された氷河の重量により山岳斜面をえぐり取り、スプーンカット状の地形を作りだす。これがカールとよばれ、そのカールの底にでき上がった湖が天狗池だ。ここを「天狗原カール」という。

■氷河擦痕

天狗池の上にある羊背岩には氷河が削ったといわれる長い滑り傷のようなものがある。これは氷河の中の固い石が比較的軟らかい岩を削った「氷河擦痕」といわれるものだ。スイスの氷河地帯の岩場では珍しくないが、日本ではすこぶる珍しい。40年前これを見にこの山へやって来たのである。白井はこれを見て感激し、学者になつてしまったのかもしれない。氷河地形の核心に触れた想いだ。

■横尾岩小屋跡にて

この日は横尾山荘まで下りた。翌日は横尾山荘から30分ほどの

図書受入報告 (2002年5~6月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
鈴木正崇	女人禁制[歴史文化ライブラリー No. 138]	229pp/20cm	吉川弘文館	2002	著者寄贈
鈴木正崇(共著)	水の原風景:自然と心をつなぐもの	294pp/22cm	TOTO出版	1996	著者寄贈
鈴木正崇	山と神と人:山岳信仰と修験道の世界	198pp/19cm	淡交社	1991	著者寄贈
鈴木正崇(編)	大地と神々の共生:自然環境と宗教[講座・人間と環境 No.10]	261pp/21cm	昭和堂	1999	編者寄贈
エアハート(著) 鈴木正崇(訳)	羽黒修験道	344pp/22cm	弘文堂	1985	訳者寄贈
高田直樹	なんで山登るねん:わが自伝的登山論[河出文庫 No.タ-18-1]	342pp/15cm	河出書房新社	2002	出版社寄贈
今西錦司	山の随筆[KAWADE 山の紀行]	253pp/19cm	河出書房新社	2002	出版社寄贈
冠松次郎	峰と溪[KAWADE 山の紀行]	249pp/19cm	河出書房新社	2002	出版社寄贈
山崎幸二・他(編)	珠穆朗瑪峰1996:立正大学山岳部エヴェレスト登山隊	142pp/26cm	立正大学山岳部	2001	発行者寄贈
明治大学山岳部	明治大学山岳部80年誌:MAC杯迎会80年の歩み	314pp/26cm	明治大学山岳部・杯迎会	2002	発行者寄贈
奥田仁一(編)	ナムナニ峰:関西大学体育会山岳部ナムナニ峰登山隊報告書	74pp/26cm	関西大学体育会山岳部	2002	発行者寄贈
出利業義次(編)	遙かなるチベット クーラカンリ:中央峰・東峰初登頂の記録	191pp/30cm	東海大学ヒマラヤ遠征委員会	2002	発行者寄贈
中西俊明	白馬岳・鹿島槍 他[YAMAKEI YAMAPシリーズ①]	159pp/21cm	山と溪谷社	2002	出版社寄贈
津野祐次	八ヶ岳・蓼科山 他[YAMAKEI YAMAPシリーズ②]	159pp/21cm	山と溪谷社	2002	出版社寄贈
花畑日向	尾瀬・燧ガ岳・至仏山[YAMAKEI YAMAPシリーズ③]	159pp/21cm	山と溪谷社	2002	出版社寄贈
小嶋修一	山がくれたガンに負けない勇気:「生きがい療法」20年の歩み	285pp/19cm	山と溪谷社	2002	出版社寄贈
日本勤労者山岳連盟(編)	どうする山のトイレ・ゴミ:オーバーユースと登山者の課題	183pp/21cm	大月書店	2002	出版社寄贈
HAT-J(山と溪谷社・山と溪谷社)	「山のオーバーユースについての実態把握アンケート」調査結果報告	49pp/30cm	HAT-J	2002	発行者寄贈
山岳写真の会「稜」	日本10名山(写真集)	84pp/25cm	東京新聞出版局	2002	出版社寄贈
金田正樹	災害ドクター世界を行く:国境を越えた緊急医療援助17年間の奮闘記	238pp/19cm	東京新聞出版局	2002	出版社寄贈

自分の想いを、 「本」にしませんか。

自費出版

——山岳書をつくるプロが、発刊のお手伝いをします——

山行記録集のほか、紀行・随筆・歌集・句集・詩集・写真集・記念誌などを、お望みの形や様式でつくることができます。まずは、お気軽にご相談ください。

画材や写真、デザイン、印刷など、お問い合わせ・お申し込みは——編集プロダクション

Tel.075-604-3120 Fax.075-604-3123
E-mail takeuchi@fd3.co.jp

TAKEUCHI 制作室
GRAPHIC ARTS & EDITORIAL

〒612-8427 京都市伏見区竹田真木町55番地 F.D.サン

横尾岩小屋跡まで行く。岩小屋の巨岩は高さ約25m、その手前にある2番目の巨岩は高さ約15m、この2つの巨岩は「南岳凝灰角礫岩」であった。しかしこの横尾谷全体には「南岳凝灰角礫岩」は一切ないとのこと。ではどこから転がってきたのか。これを「迷子石」とよび、横尾尾根のCOLを氷河の上に乗って運ばれて来たというから、4〜7万年前のロマンを感じるのは筆者のみではないだろう。

*氷河地形を実際に見聞していたために、9月20〜22日の日程で研修山行を予定しています。

会務報告

6月理事会

日時 6月12日(水)18時30分～20時45分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 大塚会長、長尾、村井、芳賀各副会長、西村、今村、高原、朴元、藤本、宮下、松原、鈴木、黒川、河西、高遠、大野、中村、鳥居、小川各理事、内田、古市各監事、平林、宮崎、宇田川、鰐坂各常任評議員

〔委任〕 坂井理事

〔審議事項〕

1 平成14年度秩父宮記念山岳賞審査委員の委嘱について

長尾副会長
標記候補者を次の各氏に委嘱したい。

木下是雄、村木潤次郎、松丸秀夫(新)、芳賀孝郎、村井龍一、長尾悌夫、齋藤惇生、宮下啓三(新)、松浦祥次郎、竹内哲夫、山口肇生、西村政晃 (承認)

〔報告事項〕

1 支部行事等への参加報告

① 岐阜支部創立30周年式典

長尾副会長

5月11日、高山市で開催され、私のほか、大塚会長、西村理事が参加した。盛大な式典だった。

② 山梨支部木暮碑前祭 宮下

5月25、26日第40回目となる同祭に参加。約40名の参加があった。

③ 信濃支部第56回ウエストン祭

芳賀副会長

6月2日、晴天の上高地で開催され、私のほか、大塚会長、西村理事が参加した。

④ 岩手支部主管の北海道・東北地区集会 今村

6月8、9日、松川温泉三ツ石山で開催され、私のほか、大塚会長が参加した。

2 日・中友好チョー・オユー女子合同登山隊の募金について 松原

中国との合同登山ということもあり諸経費は少なくなく、ついでには計画遂行の援助を行いたく募金を行う。日印合同東カラコルム踏査・パドマナブ登山隊の直後でもあることから、創立記念募金のよ

うに全体的なものとししないで、一口金額も協力しやすいもの(5千円)とする。

なお、日本側隊員も橋本しをり隊長他5名も決まり、現在、中国

側と議定書の詰めを行っている。トレッキング隊の編成も計画している。

3 日印合同東カラコルム踏査・パドマナブ登山隊の状況について 西村

現在起きている印パ・カシミール紛争により、6月5日、在インド日本大使館より留守本部宛カシミール地方に対し退避勧告が出ているので、登山を中止し退避して欲しい、との連絡があった。日印合同隊なので、6月10日現地の坂井副隊長、カバディア隊長と連絡をとった。隊長の「計画続行したい」との意向を当会として受け入れることとした。その旨、登山隊から在インド日本大使館へ連絡した。今後は現地より大使館へ連絡を入れることとした。

なお、皆元気で予定通り行動しており、現在パドマナブ登山ABCへ到着したとのこと。6月下旬に登頂予定。

4 長期改善計画策定プロジェクト検討会の報告 西村

検討メンバー(4月理事会決定)による長期改善計画策定のた

めの検討会を5月25日、6月8日の2回開催した。参加者より貴重

東部ネパール登山隊隊員募集 集会委員会

集会委員会では来春4月15日より5月16日の予定で、東部ネパールの未踏峰(7000m以下)に中高年登山隊を組織し、無理のない楽しい登山を行うことにしました。詳細につきましては、次号に掲載いたします。

な意見が多く出された。

5 資料等使用、名義後援許可等願いについて 西村

以下の依頼に対して許可した。
①同志社大学山岳会より、同大学学術登山隊2002に対する名義後援。なお本隊へは平成13年度海外登山基金助成が決定している。

②日本テレビ放送網(株)より「ズームイン!! サタデー」で日本人エヴェレスト初登頂について紹介する際に使用する、書籍「エヴェレストへの道」の肖像写真の撮影。

③東北大学山の会より、同会発行予定「遙かなる山と人―東北帝大山岳部の30年の歩み―」で使用する

る山岳資料の写真並びに書籍の掲載。

6 定款の運用について 西村

第6条2項に、「――但し、婚姻関係にある者が共に通常会員の場合に限り、申し出により、いずれか1名の会費を減額し、下記の通りとする。」があるが、下線部が実状に合わない。運用上は慣行を重視し、終身会員、永年会員等にも減額は適用する。

なお、他の案件で定款を改定する機会に手続きをとることとした。

7 各委員会報告

①総務委員会 高原

●当会会議室の利用予約について
概要は、会務関連の会議を優先する。同好会等の一般利用は月初めに、翌々月までの予約を受け付ける。詳細については別紙による。

●支部長会議を5月18日午前10時より、また前夜、午後7時より支部長懇談会を開催した。大いに意見交換ができた。

②財務委員会 村井副会長

●平成14年度委員会予算の執行についての注意事項が別紙によりあった。

●5月末までの会計報告があった。

●東カラコルム・パドマナムの募金額が現在約200万円となっている。

③会報編集委員会 今村

6月号は、平成14年度総会報告がトップ記事。

④資料・山研委員会 鈴木

上高地山研において、7月8日より8月末まで、写真展「空撮日本の山(大森弘一郎氏撮影)」を行う。

⑤科学委員会 藤本

今年度探索山行「フォッサマグナと塩の道を学習する」を6月8、9日現地にて開催し、58名の参加者があった。関係者にも協力参加してもらい天候にも恵まれ充実した山行となった。

⑥自然保護委員会 河西

●高尾の森植樹祭を4月14日開催。約300人参加し、苗木1500本を植えた。最近視察したが、90%位は根づいた様子だった。

●「高尾の森」通信6号を発行。

⑦海外委員会 中村

東チベット・念青唐古拉山東部・中央部偵察(4月20日より5月24日実施)報告がスライドによりあった。外国の人が初めて入った地域であり、山に加えることに暮らす

人々の生活風景も報告された。

8 その他

①静岡支部報の合本が刊行した。

②ビールパーティーの日程を、9月6日より9月4日(水)に変更する。

③各委員会ともメールボックスはその都度開けて処理するように。

④経理担当事務局員を募集しているとの連絡があった。

会員異動

物故

小川 隆(8975)01・7・3
五十嵐幸男(11999)02・5・14

「山の本」夏の新刊発売!!

四国の山を歩く

尾野益大 著 四六判 300頁 本体1,900円

四国の山々50余座を、史跡、植物、景観など山の個性に光をあてて案内する四国初の本格的ガイド紀行。

●再版出来

エベレスト 61歳の青春

川田哲二 著 A5判 280頁 本体2,400円

1970年、8千米峰の中で最難といわれたダウラギリ第2登に成功した著者が、61歳で憧れのエベレストに挑む。

御嶽の風に吹かれてー開田高原への招待ー

久山喜久雄 著 四六判 180頁 本体1,900円

木曾御嶽の東麓、雄大な自然と文化の脈打つ開田高原に暮らす人々の姿と四季の移ろいを綴る。

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉

宮森常雄・雁部貞夫 共著

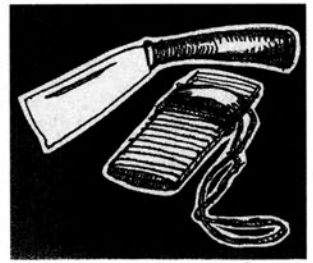
◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

河村 栄二(4800)02・5・16	角谷 允孝(10538)02・5・31	木本 淳(11539)02・6・4	松島 静吾(6192)02・6・13	嶋田晃一郎(5923)02・6・18	退会	磯野兼二郎(3711)02・6・18	船浪 静蔵(4256)02・6・18	賀嶋 増造(7941)02・6・18	栗原 昭作(9204)02・6・18	終身会員	小貫 伸一(5379)02・6・18	改姓	倉田 玲子(10850)02・6・18	玲子
														吉武

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆自然観察山行のお知らせ

自然保護委員会

爽やかな秋のひととき、伊豆の
ブナ・ヒメシヤラの天然林の中で
自然観察と森林浴をしませんか。

日程 10月5日(土) 静岡県湯ヶ島
林野庁共済組合「グリーン

天城」に17時集合

6日(日) 天城山国有林八丁
の池付近散策・観察、14時
ごろ天城峠にて解散(定期
バスに連絡)

費用 9千円(宿泊・弁当・保険)

申込 9月末日までにはがきに住

所、氏名、電話、性別、年
齢を明記し川越尚子宛(〒

185・0011 国分寺

市本多3・7・31)

*申込者に詳細案内を送ります。

◆焼岳登山と講演会

山研運営委員会

紅葉が美しい中の湯温泉登山口
から焼岳に登り上高地に1泊。大
蔵喜福氏に同行いただき、山研に
て講演会開催の予定です。

日程 10月19(土)・20(日)

*詳細は次号でご案内します。

また、本委員会では試験的に山
研の年末年始の冬季開所を計画し
ています。詳細は次号以降でご案
内します。どうぞご期待ください。

◆哺乳小動物の野外研修会(14年
第6回行事) 山の自然学研究会

東京檜原村の浅間嶺で野ネズミ
のトラップによる野外調査とイノ
シシなどのフンの観察会を実施し
ます。

期日 10月5(土)・6(日)

経費 8千円程度(山小屋に1泊
自炊)ほかに交通費実費

定員 10名

申込 8月31日までにはがきに住

所、氏名、電話、会員番号を明記

し秦和壽宛(〒186・0001

国立市北2・33・31)

◆第27回山行 初秋の乾徳山

つくも会

期日 9月7日(土)

集合 A・JR八王子駅南口7時

25分(車にて移動)／B・

JR塩山駅南口9時半

行程 登山口↓扇平↓乾徳山↓高

原ヒュッテ(下山)

会費 500円(写真・通信)

装備 暑さ対策考慮のこと

食料 昼食・行動食を各自持参

申込 8月28日までにハガキかE

メールにて渡辺たみ子・泰

則宛(〒177・0033

練馬区高野台5・2・14

TEL 03・3995・445

4 泰則携帯090・72

73・0764 tamiko

@com.home.ne.jp)

*雨天決行、状況により「西沢溪

谷」または「日帰り温泉訪問」に

変更の場合あり

◆第28回荒島岳・白山山行

つくも会

期日 10月11(金)・14(月)

行程 11日 東京駅八重洲南口バ

ス停22時半集合

12日 荒島岳登山 勝原泊

13日 白山室堂散策

14日 下山・東京駅着19時

44分

費用 約4万5千円(往復・現地

交通費、宿泊費)

装備 無積雪期(秋山山行留意)、

12日昼食、行動食

申込 8月31日までに往復ハガキ

にて諏訪肇宛(〒306・

0231 茨城県猿島郡総

和町小堤1383・7

TEL・FAX 0280・98・2

153 携帯090・85

60・2448)

定員

※12日18時半から福井支部会員と

の懇談会を予定

◆上高地山研で写真展開催

アルパインフォトビデオクラブ

6月上旬、上野松坂屋「夏山相

談所」で開催されたフォトビデオ

クラブ写真展を上高地山岳研究所

でも開催することになりました。

秋の上高地に來られる会員の皆さ

んのご来場をお待ちしています。

会期 10月17(木)・11月5(火)

会場 上高地山岳研究所

作品 国内外の山岳風景約50点

(代表 羽田栄治)

◆国際山岳年特別企画展

「立山カルデラをめぐる山々

―岩橋崇至写真展―」北アルプ

スの山と溪

世界的にも特異な立山カルデラ

を紹介。セイコーエプソン協力の

もと、5頁の細長い写真やカラー

ジュ写真など最新のプリンター技

チョー・オユー隊 現地レポートアップ

8月6日に日本を発つチョー・オユー隊が、現地からレポートを送信し、日本山岳会ホームページにアップすることを計画。

隊員が交代で、その日の登山内容や現地の様子についてレポートし、ときには写真も届けられる予定だ。また、同内容のメールマガジンも発行する。

ひとりでも多くの会員にご覧いただき、チョー・オユー登山の様子をリアルタイムで共有し、楽しんでもらいたいというねらいだ。詳細は、当会ホームページをご覧ください。

(<http://www.jac.or.jp/>)

会期 9月14(土)～10月6(日)
時間 9時半～17時(入館は16時半まで。月曜休館)
場所 立山カルデラ砂防博物館
入館料 一般400円/高大学生320円/小中学生200円
問合せ 立山カルデラ砂防博物館(富山県立山駅前) TEL 076-481-1160
◆松田敏男 山の絵展・版画展
日時 9月20(金)～10月5(土)
10時30分～18時30分
会場 ギャラリー百号(渋谷区宇田川町35-4 オークヴィレッジ1F TEL 03-3496-9517)
内容 山の風景を水彩画、シルクスクリーン、版画など

*日曜・祝日定休
◆ビールパーティ
日時 9月4日(水)19～21時
場所 日本山岳会ルーム
会費 2千円
申込 8月23日(金)までに電話・ファックス・メールで事務局へ
ル
ーム
日誌
6月 総務委員会
3日 会報編集委員会 アルパインスケッチクラブ
4日 集委員会 山岳地理クラブ
5日 アルパインスキークラブ
6日 アルパインフォトクラブ

10日 アルパインスキークラブ
11日 二火会 アルパインスケッチクラブ
12日 理事会 休山会 つくも会
13日 フィールドビデオ委員会 山の自然学研究会
14日 トイレ小委員会
15日 新日本山岳誌
17日 集委員会 資料委員会
18日 総務委員会
19日 学生会 インターネット小委員会 00同期会
20日 三水会 山研運営委員会
21日 科学委員会 97同期会
22日 自然保護委員会 95同期会
23日 96同期会
26日 図書委員会 山の自然学研究会
27日 青年部 アルパインスキークラブ 98同期会
28日 緑爽会
29日 01同期会
6月来室者 566名

■訂正 7月(686)号6ページ1段3行「チョー・オユー」は「ノーマル」の誤りでした。同16ページ4段「囲み10行」は「関西学院大学の誤りでした。お詫びして訂正します。」

◆編集後記◆

●今年の夏は記録的な猛暑と、梅雨明け宣言前の相次ぐ台風でスタートしましたが皆さんの山行計画と行動はいかがだったでしょうか。日印合同東カラム踏査隊もパトマナブ峰に初登頂して無事帰国。現在は日中女子合同登山隊がチョー・オユーに向かっています。

●最近会報の「東西南北」欄への投稿で長文(4～6ページ)のものをいただきましたが、この欄は長くて1ページ(1500～1800字)を考慮しております。多くの会員の原稿を掲載するためにご協力お願いします。

また、パソコン入力の方はメールで送信していただくと編集作業が助かります。(会報用メールアドレス jac-kaiho@jac.or.jp) (今村千秋)

日本山岳会会報 山 687号

2002年(平成14年)8月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
ホームページ:<http://www.jac.or.jp>
Eメール:jac-info@jac.or.jp
発行者 大塚博美
編集人 今村千秋
印刷 株式会社 双陽社